体験活動奨励制度に参加した高校生の取り組み

―X 高校の事例報告―

東京大学空間情報科学研究センター　浜 泰一
東京大学大学院新領域創成科学研究科　大塚啓太
教育支援人材認証協会　小山田佳代，田中美津代

【キーワード】体験活動，高校生，青少年体験活動奨励制度，広域通信制高校

1　はじめに

中央教育審議会は，平成20年5月に青少年教育特別委員会を設置し，新しい時代に求められる青少年教育の在り方を検討してきた。しかし，審議すべき事項が広範囲にわたるために，まずその取りかかりとして青少年の体験活動の推進を進めることとなり，その方策に関して平成25年1月に出されたものが，中教審答申「今後の青少年の体験活動の推進について（中教審第160号）[(1)]」である。それを受けて，具体的な施策のひとつとして，文科省事業を通して体験活動を推進することになった。文科省事業のひとつに「青少年の体験活動の評価・顕彰制度に関する調査研究」があるが，これについては一般社団法人の教育支援人材認証協会が委託を受け，2013年度より「体験活動奨励制度」を開始している。この制度では，青少年（高校生・大学生）が「ボランティア体験」，「運動体験」，「教養体験」，「自然体験」の4領域全てに一定期間継続的に取り組み，修了条件を満たした参加者が文部科学省から認証・表彰を受けることになっている。この制度については，海外にて先行して実施されている「英国エディンバラ公国際アワード」の制度を参考にしている。英国エディンバラ公国際アワードでは，個々人が成長するために努力することを重要と考え，行う内容は異なっていて当然という立場を採用している。そしてその理念は，経験から意味を見出すプロセスである「経験学習」を重視しており，体験活動奨励制度も同様の理念を引き継いで作られている[(2)]。

表1．英国エディンバラ公国際アワードと体験活動奨励制度の比較

英国エディンバラ公国際アワード				体験活動奨励制度
セクション	最低時間要件			体験の領域
Service	3ヶ月	いずれかは6ヶ月	⇒	ボランティア体験
Skiils	3ヶ月		⇒	教養体験
Physical Recreation	3ヶ月		⇒	運動体験
Adventurous Journey	1泊2日		⇒	自然体験

※ 英国エディンバラ公国際アワード HP
「英国エディンバラ公国際アワードの仕組み」[(3)]を参考に筆者作成

英国エディンバラ公国際アワードと体験活動奨励制度の内容を表1にまとめた。英国エディンバラ公国際アワードでは「セクション」となっていたところが，体験活動奨励制度では「領域」となっている。体験活動の内容は，4つの領域に分かれているので，内容には当然違いがあるが，個々人が直接的に経験することは共通である。最低時間要件についても基本的には英国エディンバラ公国際アワードのブロンズと同じになっている。また，体験活動奨励制度の認証条件を満たせば，英国エディンバラ公国際アワードの認証条件も満たすことになり，体験活動奨励制度修了者は英国エディンバラ公国際アワードも取得できるという仕組みになっている。

体験活動奨励制度の一連の流れを図1に示す。体験活動奨励制度に申し込む際には，参加者は体験を自主的・継続的に積めるような計画を立てることが求められる。その時に「アドバイザー」

と調整をして，その計画が妥当であることを確認してもらう必要がある。アドバイザーは高校生以上の参加者の場合，英国エディンバラ公国際アワードのリーダー研修を修了している必要がある。アドバイザーを自分で探せない場合は，教育支援人材認証協会が人材を紹介することもある。申し込みが終われば，すぐに4つの領域の体験活動を開始できる。参加者は，体験活動が終われば，「体験活動記録BOOK」に体験活動の内容を記述しなければならない。そして，表1で必要とされる最低時間要件を満たした上で，活動の記録を教育支援人材認証協会に提出をし，その内容が審査委員会で十分と判断されれば，文部科学省における表彰式の場で，認証が得られるという仕組みになっている。なお，体験活動奨励制度への参加は個人単位となっており，小学4年生以上なら誰でも参加できる。特に定まった提携団体等は存在しないが，継続して多くの参加者がいる学校や団体は存在する。

ところで体験活動の意義・効果について中教審答申[(1)]は，青少年の「社会を生き抜く力」の養成をあげている。それには，社会で求められるコミュニケーション能力や自立心，主体性，協調性，チャレンジ精神，責任感，創造力，変化に対応する力，異なる他者と協働したりする能力等が含まれるということである。またリーダー育成，規範意識・道徳心等の育成も期待をしている。ここに記載されていることの根拠は，国立青少年教育振興機構による「青少年の体験活動等に関する実態調査（平成26年度調査）[(4)]」の結果を基にしている。しかし，例えば，道徳観・正義感の部分は質問項目が少ない等の問題があり[(5)]，中教審答申で述べられていることの全てを，この調査だけを根拠に期待するのは合理性に欠けると考える。また荒川ら2006[(6)]は，大学生に対するアンケート調査の結果，回答者の78％が「ボランティア活動を体験した」と認識していると述べて

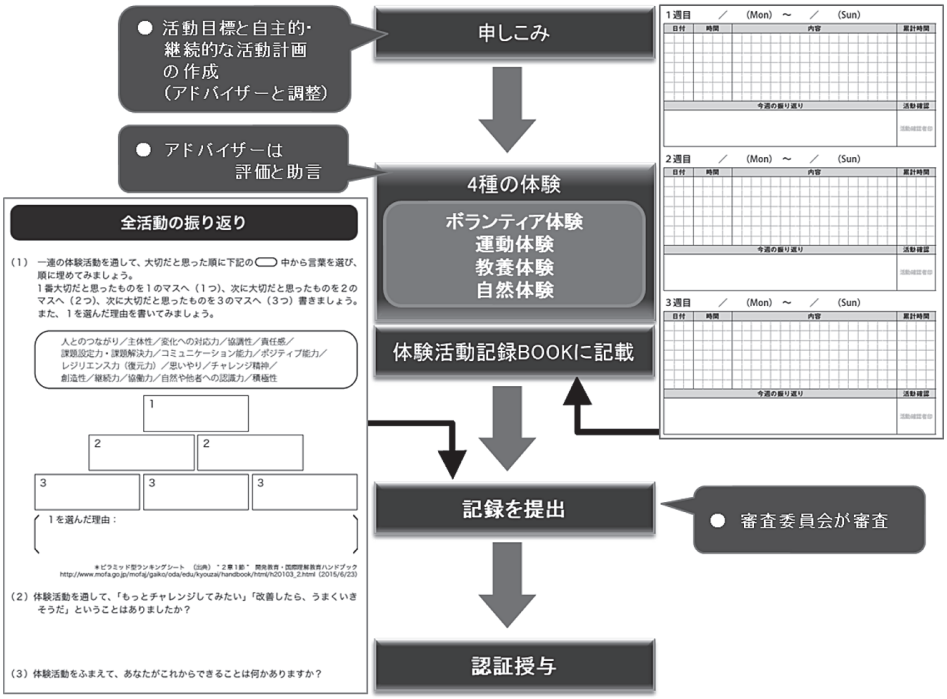


図1．体験活動奨励制度の流れ

いる。ただ「小・中・高等学校の授業の一環として」ボランティア活動体験も多く，それらを「体験した」大学生は大学入学以後のボランティア活動をしていないという結果も示しており，内容によっては，活動以降の成果が変わることを示唆している。これらのことを考えると，まだ体験活動の実践において，どのような内容をどのように行う必要があるのかは，もう少し丁寧に見ていかなければならない。つまりこの体験活動奨励制度においても，高校生がどのような体験活動をどの程度行うのかという情報を集めておくことは重要であると考える。

2016年，X高校の生徒36名が体験活動奨励制度に参加した。X高校は継続して多くの参加者がいる団体のひとつである。X高校は広域通信制の高校であり，X高校の生徒の多くは，日常，各地にあるサポート校に通って学んでいるが，体験活動奨励制度に参加した生徒たちも東京近郊にある複数のサポート校に通っている。サポート校では「トライアルレッスン」と呼ばれる自由参加形式のプログラムがあり，生徒たちはさまざまなスポーツや文化的活動などを選択して体験している。例えばスポーツには，フットサル，バスケットボールなどがあり，文化的活動には資格取得（検定）のための勉強やバンド活動などがあり，生徒たちはさまざまなものを体験することができる。さらにX高校は通信制であるためスクーリングがあるが，それを自然豊かな屋久島で実施していている。このスクーリングは生徒全員に課されている。

体験活動奨励制度に参加するにはアドバイザーが必要であるが，X高校の場合，サポート校の教員2名がアドバイザーとなっている。それに加え，アドバイザー以外の教員5名が参加者をサポートする体制をとっていた。

この制度をさらに発展させるためには学校との連携は重要になると思われる。X高校の事例はある意味特殊であるが，体験活動奨励制度では，どのようなバックアップがあれば高校生たちがこの制度に参加しやすいのか，このような制度を活用した結果，どのような効果があったのかをまとめていくことは意義があると考える。ここでは，どのようなバックアップがあったのかについてはアドバイザー（教師）の話を基に紹介をし，どのような意義があったのかについては，アドバイザーの話に加え，体験活動記録BOOKの記載内容を基に紹介をしていく。

2　X高校の体験活動に対するバックアップ体制とその効果

アドバイザーによるとX高校では，生徒が体験活動奨励制度に参加する場合，体験活動奨励制度に関する説明会を校内で実施し，それに興味を示した生徒に計画を作成させるようにしている。その後，4種類の活動を確認してくれる者と打ち合わせを行い，活動計画を立て，実際に体験活動を行うという流れになっているということであった。

活動計画を立てる時にアドバイザーは，活動の継続が可能かを考えるために，①ひとりで行うのか，みんなで行うのか？②誰かに成果を披露できるような目標を設けているか？③無理のない目標設定になっているか？④雨の日はどうするか？⑤その活動にそもそも興味があるのか？に気をつけるようにしているということであった。

体験活動奨励制度のアドバイザーを勤める教員にとっては，参加した初年度はたいへんだったという。丁寧なアドバイザー活動は教員の大きな負担となったが，8割の生徒は達成できたということであった。2年目は継続するフォローを軽減したことにより，6割の生徒が達成できたに止まり，3年目以降は，「活動記録を定期的に提出しない生徒の対応」を厳格化したところ，生徒の

5割が達成できたということであった。

実際の体験活動では，やはりトライアルレッスンを活用する場合が多いらしい。さまざまなトライアルレッスンのうち資格取得（検定）の勉強やバンド活動は人気があるということであった。これらは教養体験に充当されている。バンド活動には発表会があり，みんなで行うものは継続性の面で考えると効果的であり，発表会のような明確な目標があることも重要であるということであった。また運動に関してはフットサル，バレーボール，バスケットボールなどが人気種目となっているということで，これらの種目にはそれが好きな生徒，タイプが似たような生徒が集まることが多いということであった。しかし，ダンスはこれらとは違い，さまざまなタイプの生徒が集まってくる傾向があるらしく，苦手意識や今までの経験上，わだかまりがあったりする生徒たちは，卓球を選択する生徒が多い傾向があるということであった。これらのスポーツは運動体験に充当されている。

ボランティア活動については，地域清掃が一番取り組みやすい活動のようである。東京にあるサポート校の参加者は，地域清掃をする際に「法被」を着用しているようだが，これらや清掃道具は台東区が無料で貸し出してくれているということであった。アドバイザーからは地域の清掃を始めると，生徒には周囲の人から評価される，あるいは他の活動に広がっていくという実態があるという報告があった。また地域清掃だけではなく，介護や保育を目標にしている生徒については，それぞれの施設に行ってボランティア活動をしているということであった。ボランティア活動で大切なのは「みんな」で「楽しく」ということが継続のポイントのようである。

自然体験については屋久島の自然散策などを選択する生徒が多いということであった。後述するが，実際，参加者たちもそのことを記録BOOKに書いていることが多かった。

アドバイザーは，体験活動奨励制度の意義は，体験活動を継続すること自体や，継続できたことに対する他者からの評価にあるということであった。これらは参加者たちの「喜び」と「自信」につながっているということであった。さらに認証が文部科学省で行われる表彰式でなされるという意味も大きいということであった。アドバイザーとしては，参加して達成した生徒のコミュニケーション力は結果的に向上しているということを実感しているということであり，たとえ活動を中止して達成できなくなった場合でも，その生徒の中に自己肯定感は残っているということであった。そして，何かを始めてみようと考える参加者たちにとっては，活用しやすいトライアルレッスンがあることはとても都合が良かったということであった。

3　X高校生の体験活動の達成状況

2016年度体験活動奨励制度参加者全体の達成状況を表2に示す。この結果を見ると，高校生の達成者の割合は，他のカテゴリーの達成者の割合より少なくなっている。X高校の参加者の場合，36名が参加し，そのうち25名が達成をしている。達成率を考えると，この結果はX高校以外の高校生と特に変わりはなかった。他のカテゴリーの状況についてはX高校の事例ほど詳細にわかっていないので，この原因については，

表2．2016年度体験活動奨励制度参加者の達成状況

	小学生	中学生	X高校生	X高校以外の高校生	大学生
達成者数	138	163	25	12	49
達成率	87.3%	71.2%	69.4%	70.6%	80.3%
参加者数	158	229	36	17	61

現時点ではよくわからない。また達成できなかった参加者の記録BOOKは回収できないので，X高校の場合もどうして達成できなかったかという理由は客観的にはわからない。しかし，アドバイザーからの情報によると，達成できなかった11名については早々にリタイヤを決めていたということであり，参加者の参加意欲が二分されていたということであった。その理由についてもさまざまな理由があると考えられるが，これについても明確にはわからなかった。

4　体験活動の内容

体験活動記録BOOKの中には，活動目的・目標を記述する欄がある。ここの部分には，目標が書かれているが，どういう活動をしようとしているかが書かれている。まずこの部分に書かれている内容を集計して，X高校生たちの体験活動を概観していく。具体的には活動目的・目標の中に出てくるキーワードを抽出し，集計を行った。4つの領域別に集計したものを図2に示す。

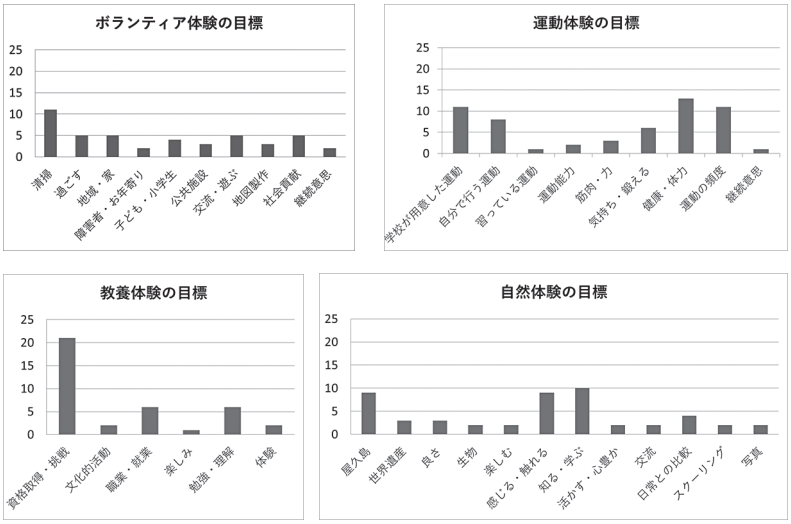


図2．X高校生の体験活動目標（N=25）

ボランティア体験では，「清掃」が多くなっている。また「子ども・小学生」や「障害者・お年寄り」という言葉もでてきており，それを行う「公共施設」，「地域・家」という言葉が出てきている。

運動体験は，「学校が用意した運動」という言葉多く出ている。これはトライアルレッスンで出てきている種目を合算したもので，25人中11人から出てきている。やはりトライアルレッスンはよく利用されていることがわかった。「自分で行っている運動」も多いがトライアルレッスンよりは少なくなっていた。次に「健康・体力」が多くなっていて，運動の動機が書かれていた。教養体験については，ほとんどの参加者が「資格取得・挑戦」といったことを書いていて，トライアルレッスンを通して何らかの資格をとろうとしている姿が伺える。結果的に体験活動奨励制度の達成者25名が，のべ28の資格を取得している（図3参照）。資格取得については，2でアドバイザーが述べていたように，達成した結果が目に見えるので，「自信」やモチベーションの向上・維持にもつながっていると考えられる。

自然体験はスクーリングで訪れる「屋久島」という言葉が比較的多く出ていて，そこで「感じる・触れる」といった行為や「知る・学ぶ」といった行為を書いている参加者が多い。何らかを屋久島に行って，「感じる・触れる」「知る・学ぶ」ということになっているが，具体的にどのようなことができるかはあまり事前には考えられていない。

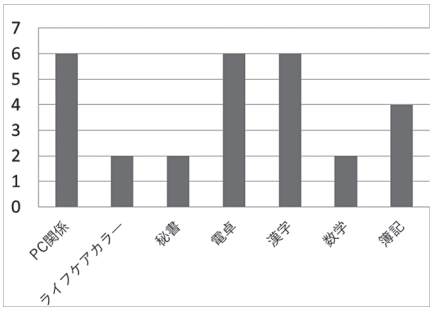
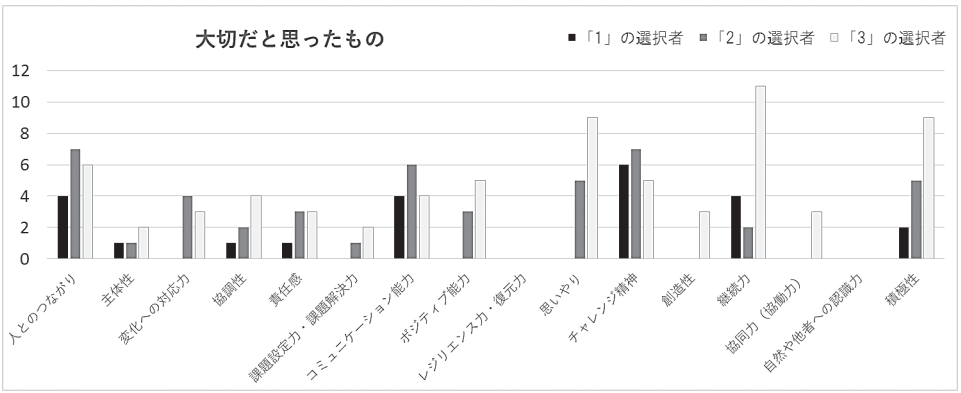


図3．参加者が取得した検定の種類（N=25）

これらのことを考え合わせると，X高校の特徴的なシステムをうまく利用して体験活動奨励制度に参加している様子がうかがえる。X高校の生徒はあまり4領域の体験活動のようなことに挑戦してこなかった傾向があるということをアドバイザーから聞いたことがあるが，そのような生徒に対して，清掃やトライアルレッスンのようなことを用意するのは，体験活動に参加する障壁を低くすることにつながっていると考えられる。一方，体験活動奨励制度では自主的・継続的な活動計画を立てる必要があるが，あまり活動に種類がなく，学校が用意したものの中だけから選択をしている様子がうかがえる。トライアルに参加するかどうか自体，生徒の自由意志で決められるし，活動の中身はそれぞれ少しずつ違うかも知れないが，これらを契機として体験の幅が広がると，より望ましいものになると考えられる。また資格取得は，生徒のモチベーション維持には重要であると考えられる。資格取得が単位認定される学校もある[(7)]。このような工夫をすることで，より積極的に体験活動に参加する生徒が増えるのではと期待される。

5　体験活動全体の振り返りについて

体験活動記録BOOKの最後に「全活動の振り返り」をしなくてはならない。自分が行った体験活動を基に「大切だ」と思ったことをピラミッド式に書くことになっている（図1の左下の図を参照）。最も大切だと思ったことをひとつ，次に大切だと思ったことをふたつ，その次に大切だと思ったことを三つ，16の選択肢の中から書くことになっている。図4では，「1」が最も大切だと思ったこと，「2」は次に大切だと思ったこと，「3」はその次に大切だと思ったことを表している



※「1」は一番大切と思ったもの，「2」は3番目，「3」は3番目に大切と思ったもの。縦軸は選択者数。

図4．体験活動奨励制度を通して大切だと思ったもの

が，そう思った参加者が何人いたかを示すグラフになっている。すべての選択肢については，図4を参照していただきたい。これらを見ると，「チャレンジ精神」，「人とのつながり」，それを支えると考えられる「コミュニケーション能力」を選択した者が多い。「コミュニケーション能力」に関してはアドバイザーの意見と合致している。一方，中教審答申[(1)]で期待されている，「社会を生き抜く力」で言われているような「主体性」や「変化に対応する力（レジリエンス力・復元力）」に関しては，X高校の達成者に関する限り，あまりそれらを大切に思う傾向は見られなかった。

これは先にも述べたが，学校のシステムを利用している面が大きく，あまり主体的に活動できていないからではないかと考えられる。また「レジリエンス力・復元力」の選択者がいないことに関しては，エディンバラ公国際アワードで考えられているほど，つまり大きな困難を乗り越えなければならないほど挑戦的な体験活動を行っていないことを表しているのではと推察される。ただ，「チャレンジ精神」を選択している参加者が多いので，X高校の生徒にとっては，思い切って取り組んだという様子がうかがえる。また選択者が少なかった選択肢を見ると「レジリエンス」のようにあまりなじみのない言葉である上に「チャレンジ精神」のように比較的内容が似ている選択肢が存在している傾向がある。「協同力」も「協調性」と比較的内容が似ている。よって達成者たちは，なじみのある表現の別の選択肢を選択した可能性も考えられる。

6　自由記述の感想の分析

体験活動記録BOOKには「これからできると思うこと」を自由記述で書くところがあるが，多くの生徒は体験活動の感想を書いている。これをKH-Coderを使ってキーワードを抽出し，共起ネットワーク図を使って，どのようなことを記述しているかを確認した。この図では○の大きさが大きいほど，その言葉の出現数が多いことを表し，線が太いほど関係が強いことを表している。この結果，「検定」「取得」「大切」といったことは強くまとまっている。また「ボランティア」については「継続」「続く」と結びつきが強く出現頻度も高くなっている。自然は屋久島と一緒に出てくる傾向があるが，全体的にあまり明確な傾向はわからなかった。

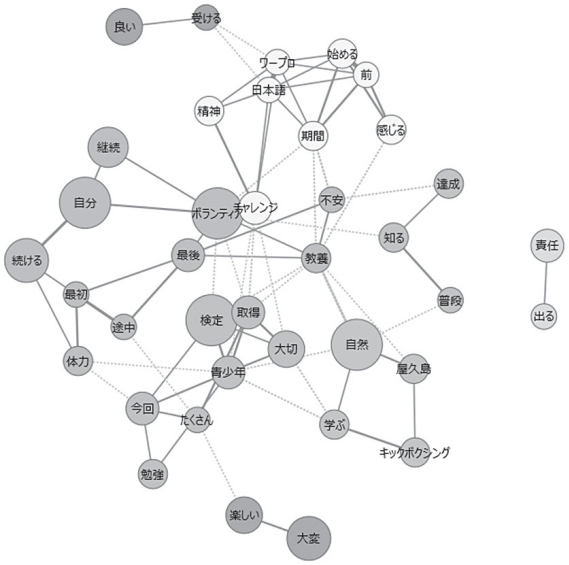


図5．X高校生の体験活動奨励制度参加者の達成状況

ここで感想文にどのようなことが書かれているかを今一度考えてみた。感想文は平均137文字書かれていたが，感想をたくさん書いた人の上位6人（全体の24％）のうち5人は，活動を始める前の不安感を書いていた。彼ら6人の平均は259文字であったが，具体的には「何でも，やる前に「だめだ，自分は無理そう」などと思っていました」や「3か月から6か月という期間は長いように感じ，不安がありました」，「責任感というと自

分にはプレッシャーもあって，正直無縁でありたかった」ということが書かれていた。しかし上位6人以外では19人のうち2人しか不安感を書いていなかった。この6人は，他の19人より「チャレンジ精神」を大切に思う傾向が低く，「責任感」,「コミュニケーション能力」,「思いやり」を大切に思う傾向が強いという結果が得られた。6人にとっては，この体験活動奨励制度の中の取り組みは，それほど挑戦的ではなかったが，責任感やコミュニケーションを大切にして活動を継続させた様子が読み取れる。

7　まとめ

X高校の生徒たちは，体験活動の内容について十分自主的に計画ができているわけではなかったが，トライアルレッスンのような学校の特性を活用して体験活動を継続できていた。体験活動を始める契機としてはこのような体制は望ましいと考えられる。また体験活動を通して，既往研究で言われているような「主体性」や「変化に対応する力（レジリエンス）」を大切に思うという傾向は見られなかった。しかし「チャレンジ精神」や「人とのつながり」,「コミュニケーション能力」を大切に思う傾向が見られた。その背景には「活動を始める前の不安感」があると推察できる。

本研究ではリタイヤした参加者の分析はデータをうまく得られなかったため，ほとんどできなかった。今後，そのような参加者からのデータを得る仕掛けも制度内に構築する必要がある。

【注】

(1) 中央教育審議会，2013,「今後の青少年の体験活動の推進について（答申）」，http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2013/04/03/1330231_01.pdf，20170701閲覧

(2) 大塚啓太，2018,「青少年体験活動奨励制度の意義と目的」,『平成29年度文部科学省委託事業「体験活動推進プロジェクト」青少年の体験活動の評価・顕彰制度に関する調査研究 報告書』，PP. 2–7

(3) 英国エディンバラ公国際アワードHP,「英国エディンバラ公国際アワードの仕組み」，http://www.intaward.jp/about.php：20170417閲覧

(4) 国立青少年教育振興機構，2016,「青少年の体験活動等に関する実態調査（平成26年度調査）結果の概要」，http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/107/File/01gaiyou.pdf，20170308閲覧

(5) 国立青少年教育振興機構（2016）では，「あいさつをするか」「友だちが悪いことをしていたらやめさせるか」「バスや電車で席をゆずるか」だけを尋ねている。

(6) 荒川裕美子，保住芳美，吉田浩子，2006,「小・中・高等学校におけるボランティア体験と大学生のボランティア観の関連」,『川崎医療福祉学会誌』第16巻1号，PP. 133–139

(7) 例えば，実用数学技能検定の場合，単位認定実施校がまとめられている。日本数学検定協会,「実用数学技能検定単位認定実施校一覧」，https://www.su-gaku.net/common/pdf/tani/t_nintei.pdf，20171223閲覧